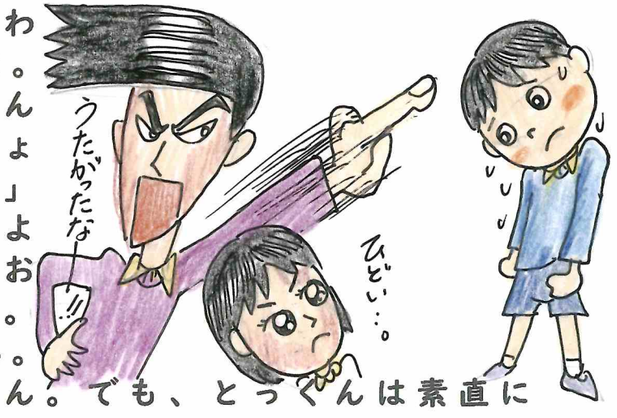
校長先生の初恋物語

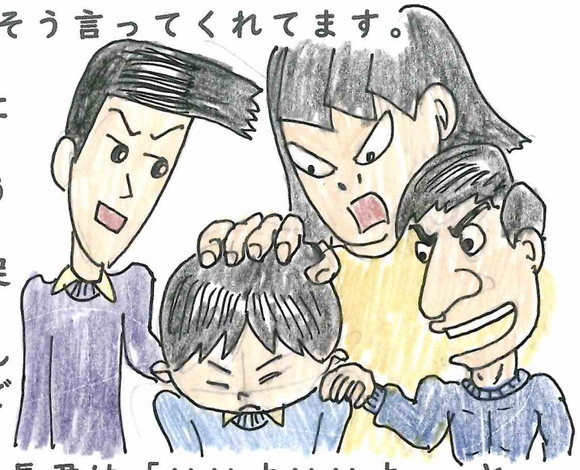
第47話　きらわれもの

　とっくんは、くじ引きの箱の中身を確認して、おもわず声を上げてしまいました。
「あっ・・・。」
そして、がっくり肩を落としました。とっくんのところに、ちん君も来ました。ちん君も箱の中を見ました。ちん君も、肩を落としました。だって、紙が1枚入っていたからです。そしてその紙の番号はたしかに、よしこさんのとなりの席の番号だったからです。
「どうしたとっくん。ぼくはずるをしてたかな。中に、くじは入っていなかったのかな。」
足長君が言いました。とっくんは、箱の中手を入れて、最後に残ったくじの紙を出しました。番号はよしこさんの横。
「とっくん、ぼくがずるをするわけないだろ。ぼくは学級委員だよ。とっくんは、ぼくをうたがったんだな。ぼくが、ずるをするひきょうなやつだって、うたがったな。」

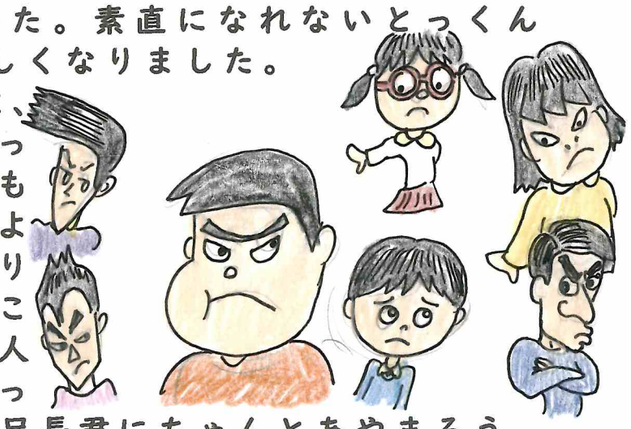


そのやりとりをずっと見ていたよしこさんも、とっくんに対しておこったような顔をしていました。
もう、とっくんは何も言えません。
足長君にあやまるしかありません。でも、とっくんは素直にあやまることができません。
　ダンプさんがあわてて来てくれました。
「とっくん、足長君にうたがってごめんねって言いなよ。」
　きんに君も来てくれました。
「とっくん、かんちがいしたんだチョー。あやまればすむことだチョー。」

みんなとっくのことを心配して、そう言ってくれてます。
　足長君だって、
「とっくん、謝ればいいよ。水に流そう。ぼくは、ずるをしてまで、よしこさんのとなりの席になろうとはしないよ。」
とっくんがうたがってしまった足長君までそう言ってくれてます。でも、どうしてもあやまれないんです。素直になれないとっくんです。



　ちん君はすぐに謝りました。足長君は「いいよいいよ。」とさわやかにゆるしてくれました。あとはとっくんです。でもだめでした。「ごめん。」がどうしても口から出てきません。きっと、よしこさんのとなりになれなかったことや、ジャイアンのとなりになってしまったことが、いやでいやでたまらないのです。
　けっきょくあやまることはできませんでした。ダンプさんも、きんに君も、何度もとっくんをせっとくしようとしましたが、とっくんはだめでした。足長君も、よしこさんも、とっくんのことをあきれていました。素直になれないとっくんは、この日から、ちょっとおかしくなりました。
　とっくんと、ジャイアンの席は、みんなからさけられる場所になっていました。ジャイアンはもともとみんなからさけられてしまうような暴れん坊でした。そのとなりには、人をうたがい、あやまることができないとっくんです。2人の席の近くには、あまり人が寄ってこなくなりました。「いつか、足長君にちゃんとあやまろう。ゆるしてもらおう。」とっくんは、こうかいして、そんなことをずっと思っていました。でも、このあと、ジャイアンと、とっくんは、二人まとめてますます嫌われてしまうのです。



つづく

次回予告　ジャイアンのいじめ